

# 国際学部におけるアクティブ・ラーニングの組織的な取り組み

宮 田 由紀夫 (関西学院大学 国際学部教授)

## 1. 国際学部所属教員の取り組み

国際学部は、多くの先生がアクティブ・ラーニングによる特徴的な授業を行なっておりますので、まずその取り組みを簡単にご紹介し、その後、私自身の取り組みについてご紹介したいと思います。

まず、ご紹介するのが、他大学との合同ゼミナールによるディスカッションです。多くのゼミナールで実施されていますが、特徴的だったのは、3大学の学生を混成にして、ディスカッションを実施するという事例です。他大学の熱心な学生を知ることができる意義もありますし、やはり対抗意識が自然とでてくるので、負けたくないということで一生懸命勉強するようになる効果があるとのことでした。次に、ゼミナールでのビブリオバトルです。ゼミナールの学生が自分の気に入った本をプレゼンテーションして、そのプレゼンテーションを聞いた学生が、どの本を読みたくったかを投票して、投票数が一番多い人が優勝という仕組みです。それから、国際学部は小規模なクラスが多いので、グループでのプレゼンテーションを講義授業の中で実施する取り組みもありました。

もう一つ、経済・経営特別演習という科目をご紹介します。この授業は、履修生を40名に制限をして、春学期の3・4時間目を連続して実施しています。講師を企業の部長や副社長など幹部クラスに依頼しています。まず講師から「私のプロジェクトX」という題目で45分間講義をしていただき、その後、1グループ8名の学生が講師の企業を事前調査した上で質問をする形式を取っています。4時間目は、質問担当ではない学生も一緒に加わってディスカッションをするという授業です。

これら一つ一つの授業は、授業担当者の努力と人脈などにより、満足度の非常に高いものになっておりますが、まだまだ組織的な取り組みに繋がっていないので、その点は課題だと感じております。

## 2. 「大学進学の原因」をテーマとした基礎演習での取り組み

それでは、私の授業での取り組みをご紹介します。1年生の春学期に開講している基礎演習Aで実施するグループプロジェクトです。これは、「大学進学の原因」というテーマで1グループ4・5人のおおよそ3グループで、アンケート調査を実施する取り組みです。

まず、授業担当者である私から労働経済学の観点から「大学進学の原因」について講義を行ないます。ここでは人的資本論、つまり自分が大学に進学すると能力が高まって、生涯賃金が高ま

## 基礎演習でのグループプロジェクト(宮田)

- ▶「大学進学の原因」グループごとのアンケート調査。
- ▶1グループ、4～5人。1クラスで3グループ。
- ▶労働経済学による説明(教員)
  - (1)本人の投資
    - (1a)人的資本論、(1b)シグナリング論
  - (2)本人の消費
  - (3)親の投資
  - (4)親の消費

ることが理由とする考え方や、シグナリング論とって、大学へ進学する理由は、大学に入学しても能力は高くないが、自分は頭が良いということを示すことで、結果として生涯賃金の高い就職先に就職できるようになるという考え方、この2つの考え方が「本人の投資」ということになります。次に「本人の消費」、つまり世の中にはやはり、大学に進学する理由が勉強をしたいことや、キャンパスライフが楽しいからという人もいます。また、「親の投資」、子供が生涯賃金を上げてくれたら老後を養ってくれるから大学に進学させるという理由もあります。最後に「親の消費」、つまり自分の子供が良い大学に進学したことを自慢したいという理由もあります。そのような理論を授業で簡単に説明します。次に、学生にこの5つの仮説を検証するアンケートを作成させます。作成したアンケートを出身高校に持って行き、アンケートを実施します。この授業の意義は、まず、高校時代に深く考えたことがなかった大学に進学する意味を再考させることにあります。労働経済学の観点から言いますと、大学に進学する費用は、4年間高校卒業して働いて得られる所得を犠牲にして捻出しているわけですから、なぜ大学に入ったのか、その意義を考えさせる目的があります。

本日のテーマに一番関係がある目的が、グループで学習する経験です。高校でも総合学習がありますが、学生に尋ねるとグループ学習はあまり経験がないとのことでした。そのため、授業評価の自由記述欄では「グループ学習に初めて取り組んだが、大変良い機会だった」という感想が多く、好評です。やはり、今まで経験したことのないことを経験できたという成功体験は大変重要です。ゼミナールの学生同士が仲良くなることも満足度に影響していると思います。また、質問項目の作成や集計作業は授業時間以外に準備を行わないと発表できないように、あえて学生に労力をかけさせるように工夫をしています。それに関連して、グループで発表した後、個人レポートをつくらせることをしています。これは、教員からすると、授業時間以外の取り組みの評価が難しいので、個人レポートを書かせることによって、積極的に関わっていない学生との差

がレポートから現れてくるからです。それから、自分の出身高校の先生に挨拶に行くという意義もあります。ただし、色々な理由で行きづらい学生には強制しないように配慮をしています。1年生の春学期なので、統計的な処理が稚拙なところもありますが、経験に重きを置いた指導を心がけています。

このやり方の問題は、多くの教員が同じことをすれば、本学に多数の進学者を出している高校には、アンケート依頼が殺到することになり、先方に迷惑がかかるということです。学部単位でシステマティックに行うのならば、担当教員間でのアンケート先の事前の調整（場合によっては出身校でなく、関学の同級生を対象にするなど）が必要となりましょう。

以上、拙いお話でしたけどもご清聴ありがとうございました。